

Title	A. S. マカレンコの美的教育について
Author(s)	広川, 正治
Citation	北海道学芸大学紀要. 第一部. C, 教育科学編, 15(2): 1-12
Issue Date	1964-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/3892
Rights	

A. S. マカレンコの美的教育について

広 川 正 治

北海道学芸大学函館分校教育学教室

Shoji HIROKAWA

On the Aesthetic Education of A. S. Makarenko.

目 次

まえがき	3. 集団主義の規律
1. 長 調 性	4. 規律の美的性格
2. 軍隊化の伝統	5. 道徳性と芸術性
	ま と め

ま え が き

われわれがマカレンコの美的教育に関心をもたざるをえない一つの理由は、彼が自分にとってもっとも大事なものとして考えていたと思われる人間の「幸福」ということに、それが直接につながっていく性質のものであろうと推察するからである。彼が書きあげようとして計画していた第四巻は、彼にとって「一番大事な本」であったが、それは「いやでもおうでも人間が幸福になるためには、どう教育せねばならぬかというテーマ」¹⁾ のものであった。あえてマカレンコにまつまでもなく、人類のもっとも一般的な・共通な願いは「幸福」ということであろう。これはまず誰しも否定しえない共通の理想ということが出来よう。しかし困ったことに、それは要するところ各個人によって感じられるものであるという意味で、もっとも主観的なものとして理解される。したがって今まで幸福を探求して来たと思われる多くの文学も、外的条件としてはむしろもっとも不幸な状態や条件をこそ描き出した。たとえば、「ロミオとジュリエット」の愛情におけるそれのように、不安な条件のなかであればこそ、そこでの満足は相対的に幸福と感じられるのである。日常の美食においてよりも、渴せる状態におけるひとすくいの清水こそ、われわれに幸福感を味わせてくれるという具合に、愛情の幸福でさえも、そうした相対的な幸福は、幸福として感じられるのであればこそ、かすかな影にすぎず、「生活の嵐に、たちまち、みるかげもなくふきとばされてしまう」²⁾ ものでしかなかった。こうしたいわばいつもの幸福ではなくて、真の幸福をめざす教育こそ、彼が果たそうとしていた一番大事な仕事であったであろう。そしてそれはいうまでもなく、彼の集団主義教育以外のものではありえない。

矢川徳光氏が指摘しているように³⁾、マカレンコの教育をわが国に最初に紹介してくれた三一書房のマカレンコ著作集は、「美学」を「倫理」と誤って訳しているのであるが、そのことに単的

に示されているように、彼のゴーリキー的楽天主義が、いわばカント的義務意識の濃い道徳主義に誤解される危険性をもっている。集団主義を全体主義的な暗さをもって理解したり、明日の「喜び」に支えられてこそ成り立つ規律、それのもつ「明るい美しさ」が後退して、点検のきびしさと罰とが表面的に問題にされてしまう危険性が多かったのも、ひとえに彼の美的な観点が理解されていなかったことによるであろう。彼の集団主義教育の美的な観点、それが教育の、そしてまた人間の理念的願いである「幸福」へと連っていくものである。この仮説に立って、マカレンコの「美」の概念を教育的に確かめて見よう。

美的教育とは、美を十分に知覚し、正しく理解する才能を育成することであり、美にたいする愛と周囲の現実にも美を創造的にとりいれる才能とを育成することである⁴⁾。その場合、マカレンコの教育における美は、芸術における、または自然におけるそれではなくて、主として社会における美であり、日常生活における美である。ここに彼の美的教育が、社会における人間生活の幸福との、したがってまた、道徳教育との不可分な関連をもたざるをえないゆえんもあるであろう。

1. 長 調 性

マカレンコの教育的努力の対象であったソビエト的児童集団のもっとも特徴的なスタイルは、明るい調子としての長調であった⁵⁾。集団生活のなかに常に流れている明るい調子、生活の調子のその明るさは、彼に大きな影響を与えたマキシム・ゴーリキーの確信に充ちた楽天主義にもとづくものであろう。ゴーリキーはマカレンコにとって、生活の指導者であり、さらに彼自身のみならず、彼の生徒たちにとっても、マルクス主義的世界観の組織者であった。ゴーリキーは彼らに、歴史をみる新しい目を用意し、憎しみと情熱とより大きな楽天主義への確信と、「嵐よふきつのはれ」という願いとその大きな喜びをめざさせてくれたのである⁶⁾。したがってその明るさは決して、一時的に生じては消えゆく泡沫に似た明るさではなくて、歴史的・社会的な実証に裏づけられた、まさにマルクス主義的世界観に立つ科学的な確信から来る楽天主義であり、その確信のゆえにおのずから生じてくる明るさである。いかえればそれは、マカレンコが強調する「見通し路線」から来る喜びにもとづくものであり、マルクス主義の科学的歴史観にもとづいた将来への見通しから来る希望の喜びであり、明るさである。「人間生活のほんとうの刺戟になっているものは明日の喜びである」⁷⁾が、その喜びを科学的見通しに立って組織することによって、集団生活における長調が生まれて来る。ゴーリキーの楽天主義は何よりも決定的なものであるが、「彼が楽天主義者であるのは、未来に幸福な人類をみているとか、嵐の中にも幸福を見出すからだけではなく、彼のところではそれぞれの人間が善良だから」であり、しかもその「善良とは、美しさと力の意味」⁸⁾であったように、マカレンコの見通し路線に立つ長調はゴーリキー的楽天主義として、つねに子どもたちに幸福を見いださせるばかりでなく、彼らのうちに美しさと力とを育てていくものであるであろう。なぜなら彼の初めの教育施設コロニヤはゴーリキーの名をかぶせたほど、彼の施設の生徒たちは「ゴーリキー人」をめざして教育され、育っていったのであるから。「集団における長調は、きわめて落ついたしっかりした姿をそなえていなければならない。それはなによりもまず、内的な確信ある落着きのあらわれであり、自分の力にたいする、自分の集団の力にたいする、自分の将来にたいする確信のあらわれである。」⁹⁾したがって彼の児童集団にあたっては、ヒステリックなわめきや、金切声をあげて走り騒ぐような動物的行動を許さないし、その必要がないのである。陰気な顔つきや不満な表情がなく、いつも変らぬ元気な・陽気な気分がその集団のスタイルの特徴をなしているのである。

A. S. マカレンコの美的教育について

このような生活の調子は、特別な方法によって創り出されるものではなく、いわんや偶然にそうなるのではない。それは彼の教育の全体的成果なのであり、集団のすべての仕事の結果なのである。¹⁰⁾ つまりそれは、集団生活の本質の表現としての長調なのである。そしてこのことはまた彼の「規律」が教育の結果でありながら、その規律が集団を、集団の成員である子どもたちを教育していくことになるように、長調という集団生活の調子が、逆にまた集団を、その成員たちを教育していく。この意味において長調を集団生活のなかに形成していく諸てだては、そのまま彼の教育の方法であり、教育のあり方であるとみることができるであろう。かかる側面にわれわれはマカレンコの「美的」教育をみるのである。

教育はつねに全面的な働きであり、またそうしなければならない。自然および社会の本質をただ知的に認識するだけでは足りない。それを行動によって実現し、表現せずにはおられぬほどに感じとられねばならない。その点にスタイルにおける長調のもつ楽しさ・明るさ・快さの教育的意義があるであろう。

2. 軍隊化の伝統

マカレンコの教育施設では、どのようにして集団生活の長調、すなわち生活のスタイルの楽しさ・明るさ・快さが形成されて来たのであろうか。その点でまずわれわれの関心をよぶものが「軍隊化」である。ところで彼の集団主義教育を軍国主義教育・全体主義教育と誤解させる原因になっているものも、この「軍隊化」である。したがって、この問題については深く検討しなければならない。

いまそれを一応、ジェルジンスキー・コムーナで、スタイルとして伝統になっていたものについて確かめることにする。コムーナ（工場併設学校）の編成は寄宿舎生活をよりどころにして、「部隊」編成になっている。全校集団の単位集団である部隊の責任者は「隊長」と呼ばれる。コムーナの毎日の運営は「日直」隊長の責任において進められる。生活を律する合図はすべて「ラッパ」によって行なわれる。学校集団の統合の象徴は「旗」である。それはまさに軍隊における軍旗と同様、「旗手」によって捧持され、「衛兵」によって守られる。またコムーナの入口には「銃をもった歩哨」が立って出入者の点検をしている、といった具合に「軍隊化」されている。

このような「軍隊化」は伝統として形成され、コムーナに継承されて来ているものなのであるが、この軍隊化の伝統を、マカレンコは「遊びの伝統」という。だからこそ、それはまた「美学の有効性」をもつものとみただのである。¹¹⁾ それは軍隊の規則の単なる反復・物まねではなくて、軍隊生活・ソ連赤軍の生活のなかにある「美しいもの・人びとを魅惑するもの」を児童集団の生活のなかに生かそうとしたのである。ここにわれわれは、彼が美しいものを「人びとを魅惑するもの」と考えていること、だからこそ「軍隊化」を「遊びの伝統」として育成しようとしたのだということが理解できよう。

一般に「美」というとき、それは通俗的には、まず感性的なもの、主観的に快いものと理解されている。美的価値を有するものは、最低少くともわれわれに快感を与えるものでなければならない。マカレンコが形式を問題にし、「形式はそれが美しいものであり、それが快適であるときにはじめてよきものである」といい、「子どもたちは人びとにびっくりされるほどに美しい、精彩のある服装をしていなければならない」¹²⁾ というとき、重要なことは「快適な美しさ」なのである。服装のみならず、花があり、部屋は清潔で、履物も亦清潔であること、「靴はいつもピカピカさせていなくてはならない」¹³⁾ といわれ、「子どもたちの生活は、心地よい、美しい家具の

なかでおくられなければならない」¹⁴⁾といわれるのもこの意味においてであり、総じて装飾が彼にとって「美学」であるわけも、¹⁵⁾「美しい」ものは「心地よい」ものなのであり、子どもたちに「魅力あるもの」として、彼らをひきつけるところにあるであろう。

一般的なスタイル、絶えまない集団的な運動や内容のうえにきずかれているスタイルが存在するところには、外的な丁寧さの形式が、おそらくは軍隊化をいささか思いおこさせるとしても、そういう形式が、児童集団では必要であり、有益であって、集団をこのうえなく「美しくしていく」のであるが、そのことはつまり、集団を「魅力あるものにしていく」ということなのである。¹⁶⁾

マカレンコは学校の教師集団を組織する場合にも、「せめて一人の美しい若い男教師、一人の美しい若い女教師がどうしてもいなくてはならない」¹⁷⁾という。そしてそのことによって、生徒たちが「いささか恋愛をするようなことがあってもかまわない」¹⁷⁾というのも、その恋愛が「みるからに心地よい、ある種の美学となる」ことを期待しているからであり、「集団のなかではやはり美学が、美が子どもたちを魅することが必要」¹⁷⁾だからであった。

マカレンコが集団を組織する場合、集団生活のスタイルとして軍隊化を問題にしたのは、以上見て来たことによって明らかなように、子どもたちをひきつけるものとしての美しさ、美学を軍隊的形式、つまり子どもたちにとっては遊びとしての形式において見たからにはほかならない。集団生活の価値・内的本質に子どもたちをひきつけるところに教育的な意義を認めていたのであり、それが心地よく、魅力あるものとしての美学であった。しかし形式そのものが何の条件もなしに美なのではない。そうではなくて、集団生活の展開の過程で、次第に一般的なスタイルが存在するようになったとき、集団の絶え間ない運動や内容のうえに次第にスタイルが存在するようになったときに、集団生活の諸行動がある種の形式をそなえるようになったときに、すなわち日常生活の積み重ねの結果として形成された形式そのものが「より高い文化の標識」となったときにはじめて、「美学に到達した」¹⁶⁾ことになるのである。しかし「のちにはこの美学を、それ自身が教育の働きを行なう要因である」¹⁶⁾と見なすようになる。ここに彼は、軍隊的な形式を、集団生活の内的な本質的なものに子どもたちをひきつける魅力あるものとして、教育的に価値あるものと見たのである。マカレンコが遊びを、美的なものとして、教育的に価値あるものとして理解するのは、遊びが子どもたちにとって、「自分のなかの何物かを少しばかり表現しているということ」、彼らは遊んでいるのではあるが、「自分が何かしら少し高いものになっている」¹⁸⁾ということ、子どもたちに感じさせるものであるからであった。遊びは子どもの現実的欲求を表現しているとともに、それは子どもたちをより価値的に高めるものとしてひきつけるものである。ここに遊びが美学であるゆえんがある。そしてまた子どもの集団的生活での遊びが「軍隊化」をおのずから要求したというところに、マカレンコにとっては、児童集団における「軍隊化」の伝統の教育的意義があるのである。

軍隊化の伝統は、つまり遊びの伝統であった。¹¹⁾マカレンコにとって伝統とはいかなるものであろうか。かれのコミュニナ教育実践のなかで、始めは校長たるマカレンコが日直隊長を連れて寄宿舎の各寝室を点検していた。そのさい校長はコミュニナの長として「気をつけ」の号令と敬礼とで迎えられていた。また点検の結果によっては、彼は責任者として罰をくだす権利さえもっていたのである。ところが校長が次第に多忙となり、毎日みずから点検に出ることができなくなった。そこでそういう場合には、「明日はでられないから、点検は日直隊長が行なう」と通知していた。この形式がしだいに習慣的になっていった結果、ついに「点検のときは日直隊長をコミュニナの長として迎える、という伝統」ができたのである。¹⁹⁾このようにしてしだいに、たとえば、

「日直隊長の報告は点検されるべきでない」という伝統、衛生委員には「かならず年下のきれいずきの女子が選ばれる」という伝統が形成された。さらにまた、総会を開くことのできるものは日直隊長であること、総会のための合図はラップであり、それに従ってオーケストラによる三つの行進曲が奏せられること、第一の行進曲は聴くためのものであり、第三の行進曲が終るまでには校長もホールに来ていなければならないのであり、校長の命令「旗のもとに起立！気をつけ！」がかかって始めて、旗が入場するのであり、その上ではじめて、日直が「総会、開始」の宣言をするのである。という総会開始のときの伝統がつけられていったのである。²⁰⁾

以上のような彼の具体的な伝統を検討してみると、諸伝統に共通する本質的な特質として、それは第一に、「集団をかためていくもの」²¹⁾であり、第二に集団生活の「時間とエネルギーを節約する」²²⁾ものであり、第三に「生活を美しくする」²²⁾ものである、と要約することができるであろう。

軍隊化の伝統もまた、そうした特質を保ちながら、特に第三の点が強調される。すなわち軍隊化の伝統の教育的意義は、「集団を美しくする（ウクラシャーチ、飾る）もの、集団生活を美しく、魅力あるものにする外的な骨組」²³⁾であること、美学・正確を育てること、集団の力を保持し、不明確なぶかっこうな運動、運動のだらしなさ、運動のみだれを防ぐもの」¹²⁾という点にある。

形式が形式として美しくあるのは、形式がもりこんでいる内容の価値によるであろう。価値ある内容を、もっとも妥当な形で表現する形式であるときに、その価値ある内容を、その意味で必然的に表現しているかぎりでの形式が美しいのである。マカレンコの軍隊化の伝統が、集団を美しくするものであり、したがってまた魅力あるものであるというとき、伝統となった集団生活のスタイルとしての形式が表現しているであろう内容は何かであろうか。軍隊化の伝統が集団の運動の不明確なぶかっこうさ、だらしなき、乱れという集団の弱화를防ぎ、集団の力＝規律性を保持し、強化するところに、つまり集団をニカワするところに、その美学があるといえるであろう。マカレンコにとって教育するとは、群を集団に組織することであり、集団の組織化の結果、形成された集団生活の流れが規律であった。したがって軍隊化の伝統が表現しているはずの本質的内容は、集団の統一的力としての規律性であるといえるであろう。

軍隊化の伝統は「全集団的運動の意義を強調するような美的秩序の組織的外形」²⁴⁾であると考えられているのであるが、そのなかでも特に赤旗が伝統のためのすばらしい内容であるといわれるのは、それがコムーナの集団の象徴であり、「学校で旗を尊敬すること——これはもっとも豊かな教育的手段である」²³⁾からである。軍隊化の伝統の中核をなすものは、この赤旗であったといえるであろう。コムーナの最高決定機関は総会であるが、前述したように、総会開始の伝統を見ても、その中心は校長であるよりは旗である。校長といえども、旗には敬礼しなければならない。また旗手はコムーナに在籍するかぎりその任にある「終身官」であって、総会によって選出されたもっとも立派なコムーナの正会員である。旗手は罰しられることはない。旗手には別室が与えられており、彼が旗を捧持し、あるいは旗のもとに立っているときは、他のコムーナ員は彼を「君」呼ばわりすることができない。また旗は一分といえども衛兵をつけなくてはおかたてはならず、旗を移動する場合には、全集団を整列させ、オーケストラが奏せられなければならないことになっていたのである。²⁵⁾ こうした伝統は何を意味するのであろうか。集団がその象徴としての旗を尊敬するということの教育的意義は、集団の本質である規律性＝団結力を価値づけること、それを強化することにある。そこにこそ集団主義教育の目的もあるのだから。しかもそうした伝

統が美学でもあるわけは、子どもたちにとって軍隊化の伝統が魅力ある遊びであるということだけによるものなのであろうか。決してそれだけでない。というよりは、旗を中心とする伝統が子どもたちにとって遊びの伝統として、彼らをひきつける魅力あるものであるためには、すでにふれたように、その形式そのものが「より高い文化の標識」として教育的に価値あるものの表現でなければならないだろう。そうした価値ある内容が集団の規律なのである。旗が「赤い」から美しいのではなくて、日直隊長の腕章が赤い絹地で出来ているから美しいのではなくて、たとえば総会の開始の伝統的儀式に表現される通り、コムーナの全員が真に、自分たちの共通の目的を実現するための、集団の団結力の表現として旗を迎え、自分たちがそれに依拠し、それにおいて自由であり、それにおいて守られているその集団の権威にたいする尊敬のおのずからなる現われとして、旗に敬礼するとき、そうした集団生活の全体の中に位置づけられている、またそうした意味をもっている「赤旗」であるかぎり、それは「美しい」のである。同様にまた、日直隊長の腕章にしても、その腕章が今日一日のコムーナの運営の全責任を総会から委託されている責任者であることを示すものであり、その腕章をつけている者の命令に従うことは、自分の願求をも含めたコムーナ全集団の権威に従うこと、その権威をいっそう価値づけ、強化することであり、それに従わないことは、自分を含む全集団の権威を弱め、低くめることであると、集団の全成員に感じとられているかぎり、その赤い腕章は美しいのである。

また逆にそうした意義をもち、集団の成員の多くによって、その意義が確認され、まさに感得されているものであればあるほど美的なものとして、子どもたちをその価値へと誘い込む力・魅力をもつのである。

3. 集団主義の規律

集団主義的規律は新しい社会体制に特有な規律であり、したがってまたそれは新しい原則にもとづく規律である。それは本来的には、「労働者と貧農の組織を信頼するという規律、同志的な規律、万人を尊敬するという規律、自主的に創意を發揮してたたかうという規律」²⁵⁾である。社会主義社会を建設するという革命的歴史的経験のなかからレーニンがすでに要約してくれているように、集団主義的規律は、第一に人民大衆を「信頼する」という規律であり、万人を「尊敬する」という規律である。それは万人が民主的にひとしく主人であり、ひとしく幸福でありうる条件をもつ社会を建設するという大目的に向って、それを妨げるものと断固として「たたかう」ための同志的規律である。それはみずから立てた願求に、みずから服従することを要求するおきてである。他のものから、自己の目的や願いとは違った立場から支配されるおきてではない。それに従うことによって、目的のより効果的な達成をかちとらねばならないために、定められた秩序を守るにしても、命令を遂行するにしても、自分の義務を果たすにしても、自分の責務に服従するにしても、自主的に創意を發揮せずにはおれない性質の規律である。

革命前の階級的・敵対的社会における規律の本質は、「人民の圧倒的多数が少数支配者に服従することであり、幾百万の勤労者が搾取者たちの意志に服従すること」²⁶⁾であった。したがってその規律は「支配の形式・個人を抑圧する形式」であり、「統御の方法・権力の諸要素にたいして個人を従順にする方法」²⁷⁾であった。しかし、それとはまさに反対に、集団主義的規律は、各人が自由な状態において、自主的に確認した、みんなに共通な願求として、「集団の目的をもっともよく達成する形式」²⁸⁾であり、各人が真に人間として、また人格として成長発達するための不可欠の条件でもある。そしてまた、前者は他律的で、教育の手段であったのにたいして、後者

は自律的で、教育の結果として形成されるものである。しかも集団主義の規律で注意しなければならない点は、それが決して個々の特別な方策の結果ではなくて、「全」教育課程の結果であり、教育的作用の「総和」の産物である、²⁹⁾ ということである。したがって、その規律を守るものにとっては、その意義・必要性について自覚的でありながら、しかもおのずからなるものとして「意識的」規律である。

「規律は道徳的・政治的な現象」³⁰⁾ であるといわれるように、規律は社会主義道徳の中核になっている。したがってまた、道徳教育の中核的徳目が規律である。マカレンコのこの意識的規律育成としての道徳教育については、特にその点について混乱状態にある現在のわが国にとって、考えさせられる多くのものがあるが、ここではふれない。しかし、彼がかかっているところの、道徳教育の根拠となるべき規律の一般的命題については、ここでふれざるをえない。それはつぎの四点である。

- (1) 政治的・道徳的福祉の形式としての規律を集団に要求すること。²⁸⁾
- (2) 規律は、個々の人格を、個々の人間を、よりよく防衛された状態に、よりいっそう自由な状態におくものである。²⁸⁾
- (3) 集団の利益は個人の利益より高い。³¹⁾
- (4) 規律は集団を美しくする。³²⁾

以上の一般的命題として示された規律こそ、集団主義の道徳の中核をなすものであり、集団主義教育の本質であるといえるであろう。マカレンコにとっても、教育とは集団に組織することであり、その教育の総合的な成果が規律であったのだからである。

4. 規律の美的性格

美学は何よりも感能 (Sinn) とか感情 (Empfinden) といわれるものの科学である、³³⁾ といわれるように、美はわれわれの感能や感情に訴える性質である。少くともわれわれに快感を与え、われわれを魅力をもってひきつけるものであるという点に美的価値をもっている。マカレンコの「美学」には、そうした側面があり、また積極的にその点から工夫されたものであった。それはすでに軍隊化の伝統によってわれわれの確かめたことである。

美しいものは感性的な快感・喜びを与えるものであり、それに重要な特質がみられはするが、ただそれだけで止まるものではない。それは気持のよい感情よりも遥かにデリケートであり、物の有用の認識よりもより豊かであり、また鮮明である。人間の他の多くの心的経験よりも、いっそう高尚であり、興奮させるものでもある。³⁴⁾ 美しいものは、美しい性質をもっている存在として、われわれの外に、われわれとは独立に存在する。それが美的な感情や観念の形式において、われわれの意識に反映するのである。すべて心的経験は客観的世界の反映であるように、美的経験もその例外ではありえない。問題は、美的経験が他の心的経験よりも、よりデリケートであり、より豊かであり、より高尚であり、興奮させるものであるというその理由は何か、ということにある。美しさが問題になるのは、直接にはその表現形式にあるが、それが何の表現形式なのか、つまり、内容が不可分に結びついた意味での形式でなければならない。美が客観的世界の反映であるかぎり、それには一般の合法則性がなければならないだろう。しかし、問題の本質は「美学的に美なるものは、つねに個別的で、二つとない」³⁵⁾ ということにある。つまり、美の美学的特性は、与えられている具体的な内容をどのように外的・物的に具体化した形式であるか、内的なものがどのように具体的な表現のなかで組織化されているかにある。

マカレンコが美的教育の領域としてとりあげている社会的日常生活の面に関していえば、政治的・道徳的現象としての規律にこそ、美学的問題が横たわっているといえるであろう。現象は普通の外的・内的世界のうちに、直接的な感性やさまざまな事情・条件・性格の気まぐれにまつわりつかれて、混沌たる偶然性の形体において現象する。この現象からうつろい易い世界の仮象と虚構とをとり去って、それらの現象が現象している本質面を、感性的に表現し、そのことによってわれわれをひきつけ、その本質的表現にわれわれが近づくことに喜びを感じずような現象が美なのである。⁹⁶⁾ 社会的現象面の現象が美しいといえるのは、それが社会的生活における本質的側面を感性的に快いもの・親しいもの・魅力あるものとして具現しているからである。そうした表現が人間の自由な意図的な働きとして創造されるところに芸術があるのである。

マカレンコが「規律は集団を美しくする」というとき、日常生活における子どもたちの具体的な生活に見られる規律ある態度が、集団生活の社会的・政治的・道徳的本質を具現しているがゆえに、そうした生活態度がそれに接する人びとを快くひきつけるのである。集団生活における規律ある態度が形成されることによって、集団内の成員はもとより、その集団に接する他の人びとをも感性的にひきつけ、集団のもっている社会的生活の本質に親しませていくところに、規律が集団を美しくするというゆえんがあるのである。

すでに見て来たように、マカレンコの伝統は集団における日常生活の具体的なあり方である。しかもそれが伝統といわれて集団にひきつがれ発展して来ているあり方は、まさに集団生活の本質的側面を表現しているものである。だからこそ伝統は生活を美しくするのである。軍隊化の伝統が集団を美化するものであるわけは、したがって外面的には軍隊生活がもつ、子どもにとっての遊びという側面であつたであろう。何よりも子どもの感覚に快く感じられる側面に、その美学は存在する。しかし決してそれだけに止まらない。彼が一般に伝統の意義として美学の有効性を主張するのは、それにもまして、伝統のもつ日常生活の形式が、スタイルが、集団生活の本質的側面をも同時に具現しているかにほかならない。それが「有効性」であるわけは、子どもたちを教育の目的である集団生活の本質＝規律性に魅力をもってひきつけ、子どもたちがおのずからそれに親しさをもって近づくように働きかける性質をもっているからである。

浮浪児社会の無政府状態で苦しんだことのある子どもたちこそ、規律のもっとも立派な味方であり、規律のもっとも熱烈な防衛者であったわけは、規律のない状態と比べて、規律ある環境においてこそ、理屈ではなくて、感覚的に、より防衛された状態、より自由な状態のあることを感得できたからにほかならない。そこに規律ある具体的な生活のあり方の美的要素があるし、その点の教育的意義もある。⁹⁷⁾

前述した日直隊長の伝統、その軍隊化の伝統、彼のすべての命令は異議なく遂行されるということ、日直としてはそれについて夕方「報告」すればよいということ、そのさい誰も彼に反対したり、日直の報告内容を点検することができない、という伝統、それがまた立派な絹の赤い腕章によって感性的に表現されているのである。その赤い腕章は「一日の秩序を単独責任制で指導していく」⁹⁸⁾ という日直隊長の集団的「権能の公の標識」⁹⁹⁾ なのである。赤旗・旗手にたいする伝統は、すでに論ずるまでもなく、集団の質としての団結の象徴であり、旗にたいする、したがってまた旗手にたいする尊敬の表現は、そのまま、眼には見えないその本性である集団の権威・集団の団結の力にたいする尊敬であり、信頼を意味する。理性的意義においてのみ存在する集団にたいする尊敬と信頼とを、単に抽象的観念的に不安定な状態に止めるのでなく、具体的実践的に強化し、ニカワしていく働きの伝統の形式であり、規律の美である。

A. S. マカレンコの美的教育について

「集団の利益は個人の利益より高い」という集団のもっとも 道徳的な本質を、集団の成員たちに感性的な具体性と親しさをもって、おのずからうけ入れさせるところに規律の美の教育的意義・規律の美学の有効性があるのである。そして個人の利益にたいする「集団の利益の優先」という則律こそ、実は 集団の成員個々人の利益を結果的に守り、個々の人間的発展、より幸福な条件の獲得を保障するものであるということ、感覚的・具体的・実践的に体験させるものが規律の美的性格なのである。⁴⁰⁾

5. 道徳性と芸術性

美の表現形式が内包している本質が集団生活の本質としての規律であるとすれば、それは一般には、美は道徳的善を表現していることとも通ずるであろう。社会生活における人間関係に限定していえば、美の内容は善であり、対象が善を表現する限りにおいてのみ、また善を表現する程度に従ってのみ美である。美は物象のなかに 出表された善を意味する。⁴¹⁾

規律についての第四の定理は「規律は集団を美しくする」ということであった。しかし集団を美しくするという規律のもつ美は、規律が教育の総合的結果であるかぎり、教育実践の第一段階において見ることのできないものである。したがって、「規律を快適なもの・魅力あるもの・生氣あらしめるものにするという問題は、まったく教師の技術の問題である」³²⁾とマカレンコもいっているように、前述した軍隊化の伝統の遊び的・感性的側面から始めて、徐々に形成組織していかねばならない教師の教育技術の問題なのである。規律が教師の多くの方途や手段の成果として創造されるものであるという意味において、規律の美は教師の精神的努力によって生み出された美として、一種の芸術美と見ることも出来るであろう。

美なるものは、社会的・集団的生活の本質を表現しているもの、われわれがかくあるべきだと考えるような生活を描いているもの、そうしたあり方を思い起させるものであり、そのゆえにまたわれわれに喜びの感情をよび起させるものであった。規律の美はそうした集団生活の本質面を表現しているものとして、われわれをひきつける力をもっており、その意味でまた教育的に価値あるものである。規律は道徳性である。その規律は教育的手段としての「きまり」を集団生活のなかで設定しつつ、それらの諸きまりを守らせながら、生活のスタイルが「伝統」として 集団に定着していくのである。すでにみて来た通り、その伝統は形成されつつある規律の、また形成すべく見通されている、あるべき規律の具体的表現として、集団生活の実践的形式として、芸術性を意味する。「規律」という「道徳性」は、「伝統」という「芸術性」において表現されるのである。集団主義教育のいわば目的という性格をもつ規律は、義務的にあえてせざるをえない当為性をもつものである。それに対して、伝統はマカレンコの多くの実践例が示しているように、単的には 軍隊化の伝統が そうであるように、子どもたちにとっても無理なく自然に、おのずからなる遊びの滑らかさをもって実践出来るという自然性がある。伝統は集団にあるべき規律の表現形式として教育的に創り出さねばならないのであるが、だからこそ芸術的性格をもつものと見られるのであるが、そのためには「なにかしらわずかばかりの本能的な保守主義といったようなものを利用せねばならない」¹¹⁾とマカレンコはいう。「保守主義」といっても、それはよい種類のものである。つまり「昨日というものにたいする信頼」というべきものである。すでに先輩たちによって創り出されている価値、それに従って生活していけば正しく、誤りなく前進できるような創られたもの、今日の自分の個人的・一時的気まぐれによってはその集団的価値を破壊することを望んでいないような、そういう集団にたいする信頼というものを、彼は「保守主義」といって

いるのである。かかる保守主義は、換言すれば自然的・感性的なものを意味する。だからこそまた「本能的な」保守主義といわれるのである。しかし同時にそれは本能的といわれるものが一般にそうであるように、直接的には感性的・衝動的ではありながら、結果的には合理的であり、理性的でさえある。直接的・端緒的には感性的・自然的でありながら、間接的・結果的には理性的・当為的であるところに芸術性がある。理性的・当為的にはあえてせざるをえない困難性をもつものであればあるほど、しかもそれを、より容易に、より自然にひき込み、誘い込むものとしておのずから実現できるように両極を調和・統一するところに、芸術性の高さがある。芸術が「理性と感性との、性向と義務との調停者として、これからのほげしい闘争を行なっている両極の間の仲介者として」⁴²⁾ 見られるのも、以上のような理由によるであろう。

マカレンコが一面ではモラルの理論や、それを教える教科課程を否定しながら、他面で伝統のもつ美学の有効性によつて規律を教育していつたことになかに、われわれは彼の道徳教育と美的教育（芸術的教育）との関連性をみるのであり、またそこに彼の教育のすぐれた特徴をみるのである。

規律の美は教師の教育技術の問題として実践的に形成されるものであつたが、マカレンコは規律の美学的側面の計画として、たとえば時間厳守の掟⁴³⁾ やもっとも苦しいいやな作業を一番立派な隊に委託するという伝統⁴⁴⁾ によつて訓練している。前述した通り、訓練であるかぎり、それは道徳的にあえてする働きでありながら、それはまた伝統としての芸術性のゆえに子どもたちをその訓練内容に誘い込んでいく教育方法の計画である。そうした計画にもとづく教育実践の結果、「規律性の最後の精巧な仕上げ」として形成される成果が集団の美意識である。マカレンコは「わたしはなんの疑いもいれず、なんの弁明もしないで、まさにその隊にそれを（一番立派な隊に一番苦しい作業を）委託するのであるが、そうするのは、それが最優秀であるし、また、それがこの信頼を感じとっているからである。その隊はこのことになかに特別な美を、美意識を感じとっているのである。」⁴⁴⁾ といひ、また「自分にとって愉快な何事かを人が遂行しなくてはならない場合、彼はいつもそれを規律がなくとも遂行するのである。自分にとって不愉快なことであつて、喜んで人が遂行するとき、まさにそういう場合に、規律があらわらわれているのである。」⁴⁴⁾ とも説明している。

規律性は集団主義教育の本質的性格であり、目的そのものでもある。したがつて規律性の最後の精巧な仕上げとしての美意識は教育成果の最高段階といえるであろう。それは規律性と美意識との統一であり、つまり道徳性と芸術性との調和である。

ま と め

現実社会のいかなる困難にあつても、なおその上に「嵐よ吹かば吹け」という楽天主義がマカレンコの教育を貫いている長調性であるが、それは教育者自身の思想的基盤としては科学的な社会主義、マルクス・レーニン主義の理論によつて、明るい未来を確信しているところから来るものであることはいふまでもないことではあるが、被教育者たる子どもたちのうちにその長調性を一貫して育成していくところにマカレンコの集団主義教育の特質があつた。それはすでに見て来たように、美的教育の側面である。人間生活のほんとうの刺戟となつてゐるものは、明日の喜びである。この明日の喜びを、今もっている現実の喜びをひき出すことから始めて、最も苦しい任務をこそ、もっとも誇り高き喜びをもつておのずから遂行せずにはおれない美意識へと形成組織していく仕事は、彼の美的教育である。内容的に集団の団結の力を育成するために、形式的に集

団生活のスタイルや調子の美を生み出していく教育が美的教育である。それは集団主義教育の本質である規律性を、美的秩序の組織的形式としての伝統を創造する芸術性において育成していく教育である。

集団形成の最初の段階では、遠く未来を科学的に見通す力をまだもっていない子どもたちの集団では、一時的・現実的興味や快感的喜びを見通し路線に従って方向づけ、組織し、それに生命を与えていく教育、「おいしい食事からでも、サーカス見物からでも始めながら、しかしつねに生活に向って鼓舞し、全集団の見通しを漸進的に拡大し、それを全ソ連邦の見通しにまで導いていく⁴⁵⁾」教育、そこに、すでに検討して来た遊びの伝統としての軍隊化の教育があった。人間を教育するということは、人間のうちに見通し路線を育てることである。そして、個人的な見通し路線と集団的な見通し路線とを調和させるところに、美的教育がある。

身近な明日の喜びを科学的見通し路線に従って方向づけながら、すなわち、集団の共通の目的を実現するための「きまり」を、伝統を創り出していく集団的営みを通して守り守らせながら、おのずと政治的・道徳的「福祉」の形式としての規律を身につけさせていくのである。その結果として集団の規律性にたいする美意識が集団の成員としての子どものうちに生み出されていくとき、それこそまさに福祉が成就したのである。そこでは、個人の仕合せは同時に集団全体の利益によって支えられ、保障されているのである。マカレンコがめざしていた「幸福」とは、まさにこのようなものであったのではなかろうか。

註

- 1) ロシヤ・ソビエト連邦社会主義共和国教育科学アカデミア版、「マカレンコ七巻著作集」モスクワ、1958. V. ctp. 280.
- 2) 同上, VII. ctp. 31.
- 3) 矢川徳光「集団主義と教育学」p. 246. 参照.
- 4) ロシヤ・ソビエト連邦社会主義共和国教育科学アカデミア版、イ・ア・カイロフ主監「教育学」、モスクワ、1956. ctp. 294. 参照.
- 5) マカレンコ前提書, V. ctp. 213.
- 6) 同上, VII. ctp. 297.
- 7) 同上, V. ctp. 74.
- 8) 同上, VII. ctp. 299.
- 9) 同上, V. ctp. 82.
- 10) 同上, V. ctp. 214.
- 11) 同上, V. ctp. 129.
- 12) 同上, V. ctp. 132.
- 13) 同上, V. ctp. 221.
- 14) 同上, V. ctp. 493.
- 15) 同上, V. ctp. 494.
- 16) 同上, V. ctp. 219.
- 17) 同上, V. ctp. 183.
- 18) 同上, V. ctp. 220.
- 19) 同上, V. ctp. 125, 126. 参照.
- 20) 同上, V. ctp. 130. 参照.
- 21) 同上, V. ctp. 125.
- 22) 同上, V. ctp. 127.
- 23) 同上, V. ctp. 131.
- 24) 同上, VII ctp. 413.
- 25) ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所編集「ヴェ・イ・レーニン全集」第四版, Tom. 27. ctp. 475.
- 26) B. E. グムールマン「学校における規律」ctp. 5.
- 27) マカレンコ, 前提書, V. ctp. 134.

広 川 正 治

- 28) 同上, V. ctp. 137, 138.
- 29) 同上, V. ctp. 135.
- 30) 同上, V. ctp. 134.
- 31) 同上, V. ctp. 140.
- 32) 同上, V. ctp. 145.
- 33) G. W. F. Hegel : Sämtliche Werke. von Glockner, Stuttgart, 1953. Zwölfter Band. Vorlesungen über die Aesthetik. Erster Band. S. 19.
- 34) G. L. エルマン「科学としての美学の特性について」モスクワ, 1961. ctp. 3.
- 35) 同上, ctp. 19.
- 36) Hegel, ibid. Vgl. S. 27, 29.
- 37) マカレンコ, 前提書, V. ctp. 138—140.
- 38) 同上, V. ctp. 141.
- 39) 同上, V. ctp. 38.
- 40) 「集団の利益の優先」という命題の具体的説明については日直隊長イワノフのラジオ受信機窃盗事件の顛末 (V. ctp. 141—144) を参照されたい。
- 41) 阿部次郎「美学」大正6年, 岩波版, p. 63, 67. 参照.
- 42) Hegel, ibid. S. 23.
- 43) マカレンコ, 前提書, V. ctp. 145—146.
- 44) 同上, V. ctp. 147.
- 45) 同上, V. ctp. 75.

(以上)